

新電元工業株式会社

ERPによる「グローバル標準テンプレート」を導入 国内外生産拠点の基幹業務の統一・標準化を実現

導入サービス：Microsoft Dynamics AX on Enterprise Cloud Global Management One



新電元工業株式会社
電装事業本部長 上席執行役員
新関 清司氏

「近い将来、生産リードタイムの大幅な短縮が予想されますが、今回導入したシステムで十分に対応できるでしょう」



新電元工業株式会社
電装事業本部 管理部長
小林 隆氏

「トップダウンでスタートし、海外拠点においては社長はじめ日本人スタッフの理解を先に固め、本部側が強い意志をもって推進したことも成功要因の一つかと思います」

企業情報

社名 新電元工業株式会社

事業概要 1949年の設立以降、パワー半導体やスイッチング電源などのパワーエレクトロニクスを主な領域として事業を拡大。現在は、半導体や電装部品、電源部品などの事業を柱とし、独創的な技術を生かした製品を幅広く提供している。アジア圏を中心としてグローバルに生産や販売の拠点を展開。半導体技術、回路技術、実装技術を併せ持つメーカーとして期待されている。

URL <http://www.shindengen.co.jp/>

- 課題**
 - ・生産拠点のシステムが個別最適化されており、標準化が求められていた
 - ・自然災害発生時などにおける事業継続性を向上させたい
- 対策**
 - ・ERPによる「グローバル標準テンプレート」を各生産拠点に導入
 - ・事業継続計画(BCP)の視点からクラウドサービスを選択
- 効果**
 - ・業務の標準化、一元管理により拠点間の在庫連携を実現
 - ・BCPにおける管理負荷を軽減し災害時における生産補完がスムーズに

課題

国内外生産拠点のITシステムの個別最適化が深刻化 大規模災害を契機に基幹業務の統一・標準化を検討

新電元工業株式会社は、半導体、電装部品、電源部品などの事業を柱として国内外で事業を展開している。二輪車・四輪車向けの電源系電装製品を主に開発・製造している電装事業本部では、タイ、インドネシア、ベトナム、広州(中国)、インド、および国内の株式会社岡部新電元と計6カ所の生産拠点をグローバルに展開。特に近年は環境に配慮した製品にも数多く取り組んでいる。

これらの生産拠点では、ITシステムは個別に構築され、現地の環境や業務内容に合わせて、それぞれ最適化されていた。しかし、2011年にタイで発生した大洪水を契機として、統一・標準化へと大きく舵を切ることになった。電装事業本部長の新関清司氏は、その背景を説明する。「ITシステムがバラバラの状態ですので、各拠点の基幹業務は統一されておらず、我々本部としてもその内容を一元的に把握できていない状態でした。各拠点で個別に運用を行う範囲では大きな問題はなかったのですが、洪水によりタイの拠点が生産不能に陥った際に、一元管理ができていなかったため、他の拠点で生産を補完することがスムーズにできませんでした。これをきっかけに、全生産拠点の基幹システムを統一し、業務を標準化していく検討をスタートさせました」

プロジェクトは、電装事業本部の管理部が主体となり、2013年に始動。プロジェクトを大きく3つのステップに分け、まず「Step1」として、「経営見える化」や「業務の標準化」の視点から実現に向けたプロジェクト構想に取り組みすることになった。

対策

クラウドサービスとして提供されるERPを選択 各拠点への「グローバル標準テンプレート」導入を図る

Step 1においてコンサルティングを行うパートナーとして選ばれたのがNTTコミュニケーションズ(以下、NTT Com)だった。新電元工業では、ERPとして「Microsoft Dynamics AX」の導入を選択。プロジェクトを牽引してきた電装事業本部 管理部長の小林隆氏は、これらの選択を行った背景や理由を挙げる。

「Dynamics AXは、ベトナムとタイの拠点に既に導入されており、全拠点へ導入しやすいと考えました。同時に、通常業務で使用しているOfficeソフトとの親和性が高いことも後押しとなりました。NTT Comについては、ベトナムの拠点にDynamics AXを導入した実績があることに加え、グローバルでのサポートに定評があることから、パートナーとして最も相応しいと判断しました。基幹システムは「導入して終わり」ではなく、長い年月使っていくものですから、サポートは特に重視したポイントです」

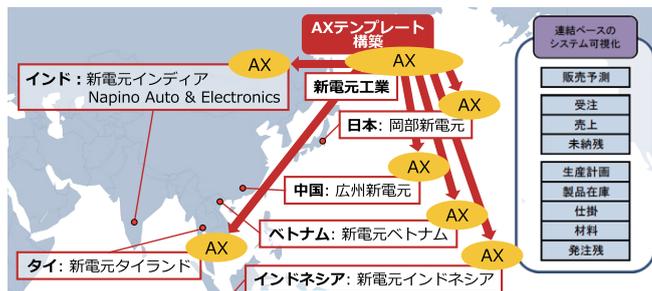
プロジェクトは、Step1でしっかりと構想を固め、実現性を見極めた上で、次の「Step2」に移行。今度はシステムの視点から、「グローバル拠点業務プロセスの標準化」と「経営指標に基づくグローバル共通KPI設定」を可能とする標準業務パッケージである「グローバル標準テンプレート」の要件定義や開発に着手した。ここでは、Dynamics AXの基盤としてNTT Comが提供するグローバルクラウドである「Enterprise Cloud」が選択された。

小林氏は「従来Dynamics AXを導入していた2つの拠点ではオンプレミスで運用していましたが、今回はBCPの観点からクラウド基盤を選択しました。タイの大洪水の際にサーバーが冠水して使用不能になった苦い経験が背景としてあります」と、クラウド化の要因を語る。

そして2015年より、各拠点にテンプレートを導入していく「Step3」に移ったが、拠点展開には、さまざまな苦労があったという。

図 電装グループサプライチェーン・マネジメント構想

■本部としてグローバル標準テンプレートを構築し、各拠点に導入、ネットワーク化する



【期待効果】・・・生産管理系をスタート
BCP対応：インシデント発生時、客先デリバリーへの影響の即時可視化、対策判断のスピード向上
⇒ 何がどこにあるか、いつ作れるか、どこなら作れるかの見える化（代替生産シミュレーションの実施）
販売・生産・在庫等の情報のリアルタイム見える化による判断とコミュニケーションの高度化
標準化によるITシステム保守運用の効率化

「一般的には、導入が容易な拠点からスタートするケースが多いですが、我々は最も歴史が古く、困難と思われるタイを最初の拠点に選びました。一番高いハードルを最初に越えておけば、その後の導入は比較的容易に進められるのではと考えたのです」（新関氏）。

タイの拠点は設立から約30年が経過しており、システムの個別最適化も進んでいた。仕事のやり方にシステムを合わせるという考え方にとらわれており、「グローバル標準テンプレート」の導入には強い難色を示されたが、小林氏らの粘り強い説得により本部が掲げる方針に対し理解が得られたという。

効果

国内外拠点間の在庫連携が可能に BCP管理面において大幅な効率化を実現

現時点において、タイに加え、広州(中国)、インドネシア、岡部新電元の4拠点への導入が完了。ベトナムとインドも2017年度中には展開を終える予定であるという。「グローバル標準テンプレート」導入による業務の標準化が着々と進行中、どのような導入効果が生まれているのだろうか。

「まず在庫管理面で効果が表れています。従来は各拠点の生産や在庫の状況を横並びで把握することはできなかったのですが、一元管理できるようになったことにより、拠点Aで不要になった在庫を拠点Bで使用するという連携ができるようになりました。現時点で、経理上もかなりの効果が上がっています」と、新関氏は解説する。

また、BCPにおいて、本部サイドの管理面負荷も軽減されているようだ。たとえばある拠点でトラブルが発生し生産が一時停止した場合、他拠点でカバーするために、従来ならその調整に8時間程度を要していたが、現在はそれを10分程度で終わることができるとのこと。これは非常に大きな効率化と言えるだろう。全拠点で標準化が進めば、グループ内の連携や効率化において、さらなる効果が期待される。

歴史も風土も異なる6つの拠点に共通のテンプレートを展開するという難しいプロジェクトが効果を発揮している要因として、新関氏と小林氏は2つのポイントを挙げた。1つは早い段階からNTT Comの協力を得て、土台となる構想定義を経営視点でしっかりと固めたこと。もう1つは、テンプレートの80%には絶対に手を加えず、残り20%のみをローカルで変更してもよいという決め事を最初に策定したことだという。

環境問題への対応が以前にも増して急務となっている現在、環境改善に寄与する製品を多く提供している新電元工業の活躍にますます期待が集まるだろう。電装事業本部においては、このプロジェクトで構築されたグローバルサプライチェーン・マネジメントが大きな支えになるに違いない。

お問い合わせ先

NTTコミュニケーションズ株式会社

法人のお客様お問い合わせ窓口 [法人コンタクトセンター]



0120-106107 受付時間 9:30~17:00

※携帯電話、PHSからもご利用いただけます。土・日・祝日・年末年始は休業させていただきます。

ホームページ www.ntt.com/business

●記載内容は2017年10月現在のものです。
●表記のサービス内容は予告なく変更することがありますので、お申し込み時にご確認ください。
●フリーダイヤルのサービス名称とロゴマークはNTTコミュニケーションズの登録商標です。
●記載されている会社名や製品名は、各社の商標または登録商標です。